

学

園

報

No.29

富山国際学園 URL <http://www.tii.ac.jp/>
 富山国際大学 URL <http://www.tuins.ac.jp/>
 富山短期大学 URL <http://www.toyama-c.ac.jp/>

富山国際大学付属高等学校 URL <http://www.tuins-h.ed.jp/>
 富山短期大学付属みどり野幼稚園 URL <http://www.fsinet.or.jp/~midorino/>

●学校法人富山国際学園

〒930-0193 富山市願海寺水口444
 TEL/076-436-5139
 FAX/076-436-5444

学園は、地域へ、全国へ、そして国際交流へ

巻頭言の最近例を見直してみました。3.11の大災害！それを受けて当然、「日本は厳しい再出発」(No.28、11年5月)。しかし今回(11年10月)の基調は、残念ながら再び政治の混迷へもどらざるをえません。ダメ菅氏の退場で一安心は束の間。「どうよう新総理」の泥の中からのメッセージは「つぶやき」かと思えば、実は官僚原稿の棒読みらしい。(a) 民主党マニフェストはほぼ全面撤退。(b) 政府の外交、国防は連戦連敗。(c) 新内閣は、見事なほどの軽量・揃い踏み。(d) 復興政策と財源は混乱。(e) 「政治主導」はゼロ敗。民主党の「金魚」とは、結局(自民党と同じ)霞ヶ関のことだったのか？(f) 他方、ウロウロ野党・自民党は、もっぱら民主党のエラーワークとは一体、何事が？政治本来の「経國の志」は何処へ行ったのか？今の日本は政治のみならず、主要メディアも恐るべき劣化とみる。国民の憂国の想いは深し。私の主張は一貫しているので、今年もNo.27(10年10月)をそのまま引用するほかはない。「思えばこのような混迷の時こそ、「国家百年の計・教育」を担う我々使命の重さを自覚し、「面も振らず」進もうではないか！」

(1) **富山国際大学** (a) 喫緊の課題は「経営改善計画」の遂行。中島学長を先頭に、地道に努力中。(b) 朗報の一つは田中・前学長の瑞宝中綬章受章、祝賀会は盛大でした。(c) 国際大の基本的テーマの一つは国際交流、とくに「北東アジア」は重要。北野現代社会学部長を団長に黒竜江省を訪れ、鶴岡師範学校と覚書を交し、さらに大連大学・中禹浪教授を迎える。中島学長が協定書に署名。学生の異文化交流も進めています。(d) 石井知事の呼びかけにより、県内・学長グループが協力を協議。(e) 子ども育成学部の目玉の一つは「教職」です。1期生(3年生)の初めての「小学校教育実習」が始まりました。(f) 学部外の地域活動では、みどり野幼稚園運動会やにながわ保育園運動会を協力サポート。(g) 卒業生のため、「キャリア支援講座」を時間割に組入れました。学部そのものが、着々と「育成」されています。(h) 国際大事務組織を、学生サービス向上をめざし再編。成果を期待します。

(2) **富山短期大学**は、少子化の逆風にもかかわらず、地域に

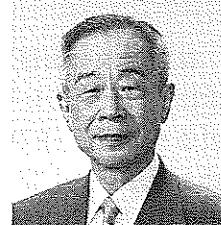
密着した地道な教育努力の実績を重ねています。(a) 幼児教育学科で特記すべきは、全国保育士養成セミナー・研究大会の主催(本文参照)。記録的成績は小芝学科長をはじめ教員、事務局の抜群の働きのたまものですが、私はこの実績によりわが短大が「全国一流レベルの学校組織」と立証されたことが、最大のよろこび。(b) 食物栄養学科は、食のキラリスト養成に注力。公開講演会「世界に誇れる日本の食と食嗜好」をはじめ、多くの講習会等を開催しました。(c) 専攻科食物栄養専攻は、食のエキスパートを養成し、「学士」取得をめざし、成果をあげています。(d) 経営情報学科は、実務教育の実力派。キャリア講演、インターンシップ、キャリア教育を実施しました。(e) 福祉学科は、全国的な志望者減少の逆風の中、ベストを尽くしています。高校家庭科の先生方との連絡会議、中学の出張授業等、草の根の努力は必ず開花すると信じよう。Self Help！(f) 全国私立短期大学体育大会へ卓球、バドミントン、バスケット、テニスが出場。男子卓球ダブルスが優勝！そのほか多くの好成績あり。

(3) **国際大付属高校**では、野球部は春の優勝により新しい歴史を開拓。女子バドミントン、女子サッカーは全国大会へ、文化部でも手話と新聞部が全国優勝！改築第2期工事も順調、志願者も増加。「文武両道の元気な高校」であることを証明しつつあります。

(4) **短大付属みどり野幼稚園**は、未就園児の「みどり野親子クラブ」を開催、これこそ幼児教育系の先端的構築の典型。これらの努力が実り、希望園児数も増加しています。

(5) **にながわ保育園**では、短大・幼児教育学科と国際大・子ども育成学部の学生ボランティア協力が保護者に好評の由。初めて「おやじの会」も発足。

(6) **理事長**は高齢のため多くの全国レベルの役職をやめつつあります。しかし、全国大学実務教育協会の監事だけは、会長からとくに依頼され、加えて国際大と短大の会員校としての立場もあり、何とか務めています。



理事長
金岡 祐一

CONTENTS

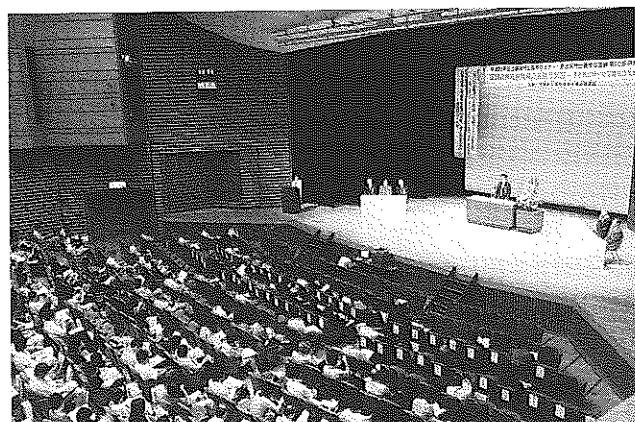
- 学園は、地域へ、全国へ、そして国際交流へ
理事長 金岡 祐一 1
- 特集1 平成23年度全国保育士養成セミナー・研究大会 開催
実行委員長 小芝 隆 2~3

□特集2 富山国際大学付属高校 新しい歴史が始まった夏	4
□平成23年度部門別学生・生徒・園児数等	5
□平成22年度卒業生進路状況	5
□平成22年度決算及び財務の状況	6~7
□学園NEWS	8

平成23年度全国保育士養成セミナー・研究大会 開催 —富山短期大学と富山国際大学及び教員と事務職員の協働により大きな成果—

実行委員長 小芝 隆（富山短期大学）

社団法人全国保育士養成協議会主催による今年度の全国保育士養成セミナー・研究大会（以下「大会」）が、去る9月7日・8日・9日、富山県民会館を主会場に開催されました。富山短期大学が担当校として富山国際大学子ども育成学部との連携協力のもと、大会の企画・準備・運営に当たりました。大会は、所期の目的をほぼ達成し、大きな成果を上げることができました。



（開会式）

全国保育士養成協議会と大会について

協議会は全国480の保育士養成校で組織しており、「会員相互の連携協力によって、保育士養成事業の振興に必要な諸活動及び調査研究を行い、もって児童福祉の進展に寄与する」ことを目的にしています。480校の内訳は、四年制大学185校、短期大学222校、専修学校等73校となっています（平成23年5月現在）。

協議会は様々な活動を行っていますが、その中でもこの大会は、会員校相互の連携協力によって実施される最も重要な活動です。

今年度の大会正式名称は、「平成23年度全国保育士養成セミナー・全国保育士養成協議会第50回研究大会」です。長い表記ですが、これは「平成23年度全国保育士養成セミナー」と「全国保育士養成協議会第50回研究大会」という二つの全国大会を統合しているからです。セミナーは会員校教職員の研修会、研究大会は会員校教員の学会です。セミナーは、今回が第32回目です。別開催であった二つの会は、1988（昭和63）年に同時開催となりました。

教職員研修と保育士養成研究とを統合したこの大会は、

わが国における保育士養成の教育と研究の向上に、大きな役割を果たしてきました。会員校の約9割が、幼稚園教諭養成校でもあります。養成校卒業生の大半は、保育所保育士やその他の児童福祉施設保育士、そして幼稚園教諭として全国の保育の現場に立ちます。また、保育者（保育士と幼稚園教諭）の現任研修においても、養成校教員がその講師等として中心的役割を果たしています。この意味で本大会は、我国の乳幼児を始めとする子どもの育ちや保護者の子育て支援に直結している極めて重要なものです。

本大会開催に至るまで

大会は全国7ブロック持ち回りで毎年開催されており、今年度は中部ブロック担当でした。北陸開催は初めてです。平成20年12月に、中部ブロック事務局より、本学幼児教育学科へ担当校依頼がありました。開催に至るまでの主な準備会等は、以下のとおりです。

平成22年12月：第1回実行委員会開催（全国保育士養成協議会中部ブロック主催 名古屋市）

平成23年3月：昨年度担当校山梨学院短期大学から本学への引継会（全国保育士養成協議会本部 東京）

平成23年4月：会員校へ「開催案内」を発送

平成23年4月：第2回実行委員会開催（全国保育士養成協議会中部ブロック主催 名古屋市）

平成23年7月：第1回富山県内会員校実行委員会

平成23年9月：第2回富山県内会員校実行委員会

この準備過程で研究大会は、富山国際大学子ども育成学部が中心になって担当することになりました。

本大会の特徴

1. 主題の重視

過去の大会主題と分科会構成の分析と検討を基に、主題を「保育者養成校教員の責務と資質－子どもの健やかな育ちのために－」とし、この下に講演、シンポジウム及び15の分科会を構成しました。主題説明に、今回初めて、実施要項1ページを充てました。

2. 中部ブロック会員校総力で分科会の企画と準備

大会内容面で、中部ブロック会員校57校が、力を発揮できるのは分科会であると考えました。第1回の中

部ブロック実行委員会において、石川県・福井県・岐阜県・三重県・愛知県3ゾーン（尾張、名古屋、三河）の七つの県・ゾーンが、それぞれ2ないし3の分科会を担当することにしました。それ以後、各県・ゾーンで、分科会ごとに運営責任者を選出し、運営責任者が中心になって、話題提供者等の分科会役員を人選し、準備を進めてきました。

3. 研究大会はポスター発表

発表者と参加者が直接、意見交換を深めることができるポスター発表のみとしました。

4. 東日本大震災に関する報告

巨大地震と津波、それに続く原発事故により、東日本の保育士養成校を始め、保育所や幼稚園の子ども達が大きな困難を強いられています。この現状を東北ブロック会長の渡辺常任理事に、報告してもらいました。

5. 参加申込等の期限厳守

大会参加、研究発表の各申込期限の厳守を、中部ブロック総会、全国理事会と総会において、実行委員会として重ねてお願いしました。その結果、ほとんど全員の方が、期限を守って下さり、大会の諸準備をほぼ計画通り進めることができました。

大会報告

セミナーと研究大会の実参加者合計は、1,166名で過去最多に上りました。

1. 平成23年度全国保育士養成セミナー

第1日目（7日）：開会式 大会後援の厚生労働省・富山県・富山市からの挨拶があり、特に子育てと子育て支援に高い関心を持っておられる石井知事からは、本大会への期待が熱心に語られました。

講演・講演〔行政説明〕「保育行政の動向と課題」

厚生労働省保育課課長補佐 鈴木義弘氏

・基調講演 「子ども・子育て新システム時代の保育者養成」白梅学園大学長 沢見稔幸氏

・記念講演 「あったか地域の大家族」NPO法人デイサービスこのゆびとーまれ理事長 惣万佳代子氏

専門委員会報告 協議会には、保育士養成に関する専門事項を調査研究するために、養成校教員からなる専門委員会（委員長本学宮田徹教授）があります。「指定保育士養成施設教員の実態に関する調査報告Ⅰ－調査結果の概要－」の報告がなされました。

第2日目（8日）：シンポジウム 大会主題をテーマに開催されました。

特別報告 東日本大震災に関する報告。

分科会 A分野「保育をめぐる今日的課題と保育者養成」

3分科会、B分野「保育者養成教育の向上」12分科会の計15分科会が開催され、各分科会では熱心な意見交換が行われました。

情報交換会 ANAクラウンプラザホテル富山で開催され、参加者は過去最多の525名に上りました。

富山県の山海の幸、そしてアトラクションとして唄い踊られた「越中おわら」が大変好評で、参加者の情報交換と交流が深められました。

2. 第50回研究大会 第3日目（9日）

研究大会 ポスター発表のみとしました。発表は、過去最多の142件を大幅に更新する222件に上り、ポスターを前に熱心な意見交換が行われました。

報告 協議会常務理事大島恭二先生より「保育士養成校を取り巻く現状と課題」の報告がなされました。



(研究大会 ポスター発表)

大会を終えて

・講演、シンポジウム、分科会、研究大会を通じ、主題の「保育者養成校教員の責務と資質－子どもの健やかな育ちのために－」を深めることができました。

この意味で、担当校の富山短期大学と富山国際大学子ども育成学部が、我国の保育士養成振興と児童福祉の進展に寄与できた貴重な機会となりました。

・大会終了後に多くの参加者から、大会運営と学生スタッフとして運営に当たった富山短期大学幼児教育学科及び富山国際大学子ども育成学部の計65名の学生の働きぶりに、称賛の言葉をいただきました。

・本大会の規模は、今までに学園が関わった最大のものです。大会開催に当たっては、富山短期大学幼児教育学科教員と事務部を中心とする事務職員との連携協力、富山短期大学と富山国際大学子ども育成学部の連携協力が大きな力を發揮しました。この意味で大会の成功は、理事長が常々述べておられる学園内の学校同士の協働及び教員と事務職員の協働によるものと言っても過言ではありません。

新しい歴史が始まった夏 国際高校野球部快進撃!!

「KOKUSAI」「KOKUSAI」。国際高校野球部の名前が、どれだけマスコミを賑わしたことでしょうか。

始まりは春季大会でした。一戦一戦強くなるという言葉通りに勝ち進み、いよいよ決勝戦。対戦相手は強豪高岡商業。息詰まるような投手戦が展開されます。8回表、我が校がついに1点先取。そして9回裏の高商の攻撃。敵も味方も、ベンチもスタンドも全員が手に汗を握りながら見守ります。高商同点。さすが伝統校、簡単には勝たせてくれず、延長突入。11回表に追加点をあげるも、その裏またもや同点に。そして迎えた12回にまたしても追加点。その裏、今度はエースが踏ん張り、ついに初優勝です。校長室の優勝旗を見ると、83回も続く歴史の重みを感じます。その歴史について本校も名を刻んだのです。

大会後は、各方面から祝福の声を頂戴しましたが、雑音も耳に入ります。「どうせ県外からの選手だろう」「県立と違って特待生がいるから」等。とんでもありません。本校野球部は全員が県内出身です。特待生はいますが、ルールの枠内です。なんといっても、県立高校の授業料無償に対し、本校野球部の保護者は特待分を引いた授業料を払っているのです。県内の私学を取り巻く環境は、そんなに甘いものではありません。そういう状況での初優勝です。

富山では春夏連覇した学校はない、との声のなかで、第1シードでいよいよ夏の大会を迎えるました。

初戦の固さもあってか、2回戦は先取点を奪われたものの7回コールド勝ち。3回戦と準々決勝戦の相手は好投手を擁する学校でしたが、打撃陣は常に先手を取り続けエースを援護します。投手陣もそれに応えて2試合連続の完封勝ち。準々決勝では補習授業を急遽取りやめ、バスを仕立てて200名の生徒がスタンドから声援を送ります。

そしてアルペンスタジアムでの準決勝。テレビ中継も始まりました。相手は昨年の覇者砺波工業です。本校からは500名の生徒、そして多くの卒業生も応援に駆けつけています。相手もほぼ同数の応援ですが、昨年甲子園で応援した経験があります。スタンドの差は否めません。それでも、選手は物怖じしていません。グラウンドに、選手のユニフォームの「KOKUSAI」の文字が躍動します。先制されるも打球がすぐに追いつき、逆転。投手も繰投で手堅く逃げきりです。試合後のエール交換、そして校歌の齊唱。校内では声が小さく、寂しく感じられますが、今日は違います。全員が胸を張って誇らしげに歌います。卒業生も何年かぶりに母校の校歌を歌っています。

今までの国際高校にはなかった文化の始まりです。



とうとう決勝戦まできました。相手は新湊高校。

我が校も500名の応援ですが、相手はあのうねるような大応援団。圧倒されそうになりながらも、生徒は懸命に選手を応援します。先輩を、後輩を、そしてクラスメートの名前を連呼しています。全員が「KOKUSAI」の名のもとに絆で結ばれています。国際高校関係者の心が一つになった一日です。

試合結果はご存じの通りです。5対4で新湊高校が優勝し、甲子園へ。あと一步、あと半歩、あと数センチだったようにも思います。県立高校並みの環境で（甲子園出場校の練習施設は全く違いますが）、あの部員数で、国際高校の全校生徒、保護者、職員、同窓生にまで「夢」を与えてくれた野球部には大きな拍手を送りたいと思います。活躍した選手だけでなく、三年間で一度も公式戦の出場がなかった生徒達もみんな一緒に戦い、歴史を作ったのです。

決勝進出が決まってからは取材の嵐でした。印象深いのは、ある全国紙の取材です。他の部活動の主な実績を聞かれて、「全国大会レベルでは、今年は男女テニス部と女子バドミントン部、空手で高校総体出場。女子サッカー部も全国大会出場。弓道部は過去に高校総体優勝。男子サッカー部は北信越プリンスリーグで熱戦中。文化部では、放送部が全国1位を5回。新聞部は全国最優秀賞1回。（数日後の全国高総文祭で2度目の最優秀賞受賞）」と答えると、「部活動にものすごく力を入れている元気な学校ですね。」との感想。我が校の生徒諸君が様々な分野で大健闘していることを再認識しました。

全校生徒が、「国際高校の生徒です。」と胸を張り、全卒業生が、「富山国際大学付属高校の出身です。」と誇りを持てる学校に一歩近づいたようです。

平成23年度部門別学生・生徒・園児数等

平成23年5月1日現在(単位:人)

部 門	学部・学科名等	収容定員(A)	1年	2年	3年	4年	合 計(B)	定員充足率(B/A)	備 考
大 学	現代社会学部	490	103	138	112	121	474	96.7%	
	子ども育成学部	245	83	75	68	2	226	92.2%	
	国際教養学部	(募集停止)							
	地域学部	(募集停止)							
	小 計	735	186	213	180	125	704	95.7%	
短 大	食物栄養学科	160	88	91			179	111.8%	
	幼児教育学科	160	94	93			187	116.8%	
	経営情報学科	200	125	117			242	121.0%	
	福祉学科	140	43	57			100	71.4%	
	専攻科食物栄養専攻	30	14	8			22	73.3%	
	小 計	690	364	366			730	105.7%	
高 校	全日制普通科	710	247	226	238		711	100.1%	
幼 稚 園		84	3歳児 39	4歳児 27	5歳児 26		92	109.5%	
	総 計	2,219	836	832	444	125	2,237	100.8%	

平成22年度卒業生進路状況

大 学

平成22年度卒業生（第18期生）の就職決定率は92.6%でした。業種別就職状況は卸・小売業が32.2%、サービス業が26.4%、製造業が19.5%と、上位3業種で78.1%となっており、富山県内企業に就職した卒業生は86.2%となっています。また、進学率は2.9%で、平成21年度に比べ減少しました。

平成23年6月30日現在(単位:人)

学 部	卒業生数	就職希望者数	就職決定者数	決 定 率	進学者数
国際教養	35	31	28	90.3%	1
地域	70	63	59	93.7%	2
合 計	105	94	87	92.6%	3

短 大

平成22年度卒業生の進路状況は好調だったといってよいでしょう。求人件数は、対前年比110.3%となり堅調でした。結果として、就職決定率は食物栄養、幼児教育、福祉の各3学科ともそれぞれ100%、経営情報学科で99.1%、全体で99.7%となりました。四年制大学編入学では富山大学、高崎経済大学、埼玉県立大学等々充実した内容でした。

平成23年5月31日現在(単位:人)

学 科	卒業生数	就職希望者数	就職決定者数	決 定 率	進学者数
食物栄養	87	78	78	100.0%	7
幼児教育	78	77	77	100.0%	1
経営情報	117	111	110	99.1%	5
福祉	55	48	48	100.0%	6
合 計	337	314	313	99.7%	19
専 攻 科					
食物栄養専攻	17	17	17	100.0%	—

高 校

平成22年度の卒業生は163名と少なく、学園内進学者が減少しましたが、割合は20%を維持しています。国公立大学合格者は1年ぶりに二桁を回復。しかし、関東地区の難関私立では苦戦が続き、中学生へのアピール度が今一つ心配です。就職では、希望者数が増え、20%に近づいていますが、8年連続で就職率100%を達成しました。

平成23年5月31日現在(単位:人)

大 学	入学者	合格者	短期大学	入学者	合格者	そ の 他	入学者	合格者	卒業生
富山国際大学	15	19	富山短期大学	18	19	専修・各種学校	34	43	
国 公 立 大 学	10	12	国公立短期大学	1	1	就 職	25		
他 の 私 立 大 学	42	61	他の私立短期大学	11	11	そ の 他	7		
計	67	92	計	30	31	計	66	75	163

平成22年度 決算及び財務の状況

平成22年度の事業報告及び決算は、去る5月26日開催の評議員会・理事会において承認されました。決算の概要是、**消費収支計算書**（1会計年度の消費収入と消費支出を明らかにして、その均衡状態を表すもの）において、消費収入の部で帰属収入合計が2,497百万円（対前年度比29百万円増・1.2%増）、消費支出の部で消費支出合計が2,682百万円（同202百万円減・7.0%減）、基本金組入額合計が98百万円（同440百万円減・81.8%減）で、消費支出超過額（いわゆる赤字）は283百万円となりました。この結果、平成21年度繰越消費支出超過額1,901百万円に、平成22年度消費支出超過額を加えた2,184百万円が平成23年度への繰越消費支出超過額（累積赤字）となりました。

収入の主なものは、学生生徒等納付金が大学、短大及び高校の在学者数の増により1,695百万円（対前年度比62百万円増・3.8%増）、補助金が大学改革推進等補助金の増などにより589百万円（同64百万円増・12.2%増）、事業収入が短大介護雇用プログラム及び職業訓練委託費の増などにより74百万円（同23百万円増・45.1%増）となりました。

一方、支出の主なものは、人件費では、退職者の減などにより1,619百万円（対前年度比181百万円減・10.1%減）、教育研究経費が高校校舎改築工事に伴う修繕費用の減などにより809百万円（同48百万円減・5.6%減）、管理経費が118百万円（同3百万円減・2.5%減）となりました。

大幅な赤字決算が続いている最大の要因は、大学の収支の悪化にあります。このため、平成20年度から大学の改組再編計画を実施し、経営改善に取り組んでいます。大学の収支の悪化は、学園全体の経営に及ぼす影響が大きく、

改組再編計画を着実に達成し、学園存続の危機的状況から逸早く脱却しなければなりません。

そのためには、まずは学生を定員通り安定的に確保することが最も重要です。大学全入時代を迎えて、大学が学生を選ぶ側から選ばれる側へと立場が変化して大学間競争が激化していることを念頭において、より質の高い教育を実施し、地域の期待に応える大学としてアピールすることが重要です。

また、補助金をはじめとする外部資金の獲得は、経済的効果を及ぼすだけでなく、大学や教員の質の高さの証明にもなり、積極的に取り組むことが必要です。併せて、設置基準や学生生徒数に見合った教職員の適正配置を行うことによって、固定費として消費支出の大部分を占める人件費の抑制や経費節約にも積極的に努めなければなりません。

資金収支計算書（1会計年度のすべての資金の収入と支出を明らかにし、資金の動きを表すもの）においては、平成22年度の収支状況を資金面の流れで見ると、収入額は平成23年度生の前受金や平成22年度末の未収入金等も含めて3,405百万円（対前年度比552百万円増・19.3%増）となり、前年度から繰り越した909百万円（同467百万円減・33.9%減）を加えると、収入合計は4,314百万円（同85百万円増・2.0%増）となりました。

一方、支出額は人件費支出、教育研究経費支出、管理経費支出、借入金等利息支出、借入金等返済支出、施設設備関係支出などで3,184百万円（同136百万円減・4.1%減）となり、差し引き1,129百万円（同220百万円増・24.2%増）が翌年度への繰越支払資金となりました。

消費収支計算書

平成22年4月 1日から
平成23年3月31日まで

(単位:百万円)

	22年度予算	22年度決算 ①	前年度決算 ②	差・異 ①-②
消費 収入 の部	学生生徒等納付金	1,681	1,695	1,633 62
	手数料	34	34	34 0
	寄付金	2	7	8 △1
	補助金	558	589	525 64
	資産運用	34	47	59 △12
	資産売却差額	1	0	1 △1
	事業収入	45	74	51 23
	雑収入	42	51	157 △106
	帰属収入合計	2,397	2,497	2,468 29
	基本金組入額	△332	△98	△538 440
消費収入の部合計				
消費 支出 の部	2,065	2,399	1,930 469	
	人件費	1,681	1,619	1,800 △181
	教育研究経費	845	809	857 △48
	管理経費	132	118	121 △3
	借入金等利息	4	4	6 △2
	資産処分差額	114	132	100 32
	予備費	16		
	消費支出の部合計	2,792	2,682	2,884 △202
	消費支出超過額	△727	△283	△954 671
	前年度繰越消費支出超過額	△1,900	△1,901	△947 △954
翌年度繰越消費支出超過額				
△2,627 △2,184 △1,901 △283				

資金収支計算書

平成22年4月 1日から
平成23年3月31日まで

(単位:百万円)

	22年度予算	22年度決算 ①	前年度決算 ②	差・異 ①-②
収入の部	学生生徒等納付金収入	1,681	1,695	1,633 62
	手数料収入	34	34	34 0
	寄付金収入	2	4	4 △2
	補助金収入	558	589	525 64
	資産運用収入	34	47	59 △12
	資産売却収入	1	0	1 △1
	事業収入	45	74	51 23
	雑収入	42	48	153 △105
	借入金等収入	4	1	4 △3
	前受金収入	463	439	461 △22
収入の部合計				
支出の部	その他の収入	1,144	997	527 470
	資金収入調整勘定	△486	△523	△599 76
	当年度收入合計	3,522	3,405	2,853 552
	前年度繰越支払資金	909	909	1,376 △467
	収入の部合計	4,431	4,314	4,229 85
	人件費支出	1,669	1,629	1,822 △193
	教育研究経費支出	569	534	572 △38
	管理経費支出	130	116	119 △3
	借入金等利息支出	4	4	6 △2
	借入金等返済支出	30	30	30 0
支出の部合計				
人件費支出 教育研究経費支出 管理経費支出 借入金等利息支出 借入金等返済支出 施設設備関係支出 設備関係支出 資産運用支出 その他の支出 予備費 資金支出調整勘定 当年度支出合計 次年度繰越支払資金 支出の部合計				
1,822 572 119 6 30 88 53 144 712 4 △226 3,320 909 4,229 84				

貸借対照表（年度末における資産、負債、正味財産（基本金、消費収支差額など）の状態を表すもの）において、学園の財務状態を見ると、平成22年度末現在の資産総額は12,550百万円で、その内訳は有形固定資産（土地、建物、備品など）7,330百万円、その他の固定資産（特定資産、引当資産など）4,012百万円、流動資産（現金預金、未収入金など）1,208百万円となりました。

一方、負債総額は1,747百万円で、その内訳は固定負債（長期借入金、退職給与引当金）769百万円、流動負債（短期借入金、未払金、前受金など）978百万円となりました。

また、基本金は12,987百万円で、その内訳は第1号基本金（設立当初に取得した固定資産並びにその後新たに取得した固定資産の自己資金による支払済額）が12,028百万円、第2号基本金（将来取得する固定資産の取得に充てる金銭等の資産額）が750百万円、第3号基本金（基金として継続的に保持し、かつ、運用する金銭等の資産額（奨学基金など））が13百万円、第4号基本金（恒常的に保持すべき資金額（資金的な消費支出の1ヶ月分に相当する運転資金））が196百万円となりました。

これにより、翌年度繰越消費支出超過額は2,184百万円となりました。

学校別収支の状況を見ると、短大以外の各校は、全て赤字決算となっています。高校については、校舎改築という特殊事情がありますが、大学・幼稚園については、経常収支において、慢性的な赤字体質にあると言わざるを得ません。大学においては、改組再編計画の途上にあり、子ども育成学部が完成年度を迎える平成24年度には、収支が均衡するよう計画目標を達成しなければなりません。また、黒字決算となった短大においても、老朽校舎改築計画に着

手しており、この計画に多大な資金が投下されることから、より一層収支の改善に努めなければなりません。

本学園はじめ地方の私学を取り巻く環境は、大学全入時代を迎え、今後ますます厳しさを増すこととなります。今後とも本学園が目指す「地域に根ざした総合学園」としての使命を果たすため、財務基盤の強化に一層努めなければなりません。

貸借対照表

平成23年3月31日

(単位:百万円)

科 目	本年度末	前年度末	増 減
資産の部			
固定資産	11,342	11,473	△131
有形固定資産	7,330	6,766	564
その他の固定資産	4,012	4,707	△695
流動資産	1,208	1,079	129
資産の部合計	12,550	12,552	△2
負債の部			
固定負債	769	808	△39
流動負債	978	756	222
負債の部合計	1,747	1,564	183
基本金の部			
基本金の部合計	12,987	12,888	99
消費収支差額の部			
消費収支差額の部合計	△2,184	△1,900	△284
負債の部、基本金の部及び 消費収支差額の部合計	12,550	12,552	△2

消費収支計算書内訳表

平成22年4月 1日から

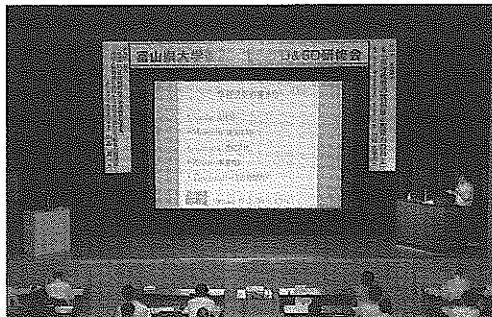
平成23年3月31日まで

(単位:千円)

	学園本部	大 学	短 大	高 校	幼 稚 園	給 額
学生生徒等納付金	0	662,889	714,690	296,886	20,886	1,695,351
授業料	0	346,231	352,360	221,471	15,776	935,838
入学金	0	71,150	89,895	39,759	840	201,644
実験実習料	0	26,233	46,995	0	0	73,228
施設設備資金	0	156,625	154,990	32,070	1,392	345,077
その他の納付金	0	62,650	70,450	3,586	2,878	139,564
手数料	0	11,376	15,011	6,902	47	33,336
寄付金	0	3,277	2,202	1,288	573	7,340
補助金	0	183,212	146,576	239,750	19,897	589,435
資産運用	40,966	2,059	3,397	66	0	46,488
資産売却差額	0	0	0	0	0	0
事業収入	0	14,752	37,925	16,552	4,689	73,898
雑収入	358	21,442	5,446	24,192	0	51,438
帰属収入合計	41,324	899,007	925,247	585,636	46,072	2,497,286
基本金組入額	104	△66,387	△69,989	38,645	△908	△98,535
第1号基本金	163	△66,387	△19,989	38,645	△908	△48,476
第2号基本金	0	0	△50,000	0	0	△50,000
第3号基本金	△59	0	0	0	0	△59
消費収入の部合計	41,428	832,620	855,258	624,281	46,164	2,398,751

	学園本部	大 学	短 大	高 校	幼 稚 園	給 額
人件費	23,369	670,409	537,209	350,556	37,221	1,618,764
教員人件費	0	491,354	385,261	299,152	36,675	1,212,442
職員人件費	21,660	169,192	149,883	29,757	10	370,502
役員報酬	690	0	0	0	0	690
退職金	750	9,863	2,065	21,647	0	34,325
退職給与引当金繰入額	269	0	0	0	536	805
教育研究経費	0	405,061	220,517	164,486	19,122	809,186
管理経費	7,164	57,706	40,499	11,660	1,121	118,150
借入金等利息	0	2,524	804	1,100	0	4,428
資産処分差額	2	1,045	1,463	129,299	0	131,809
消費支出の部合計	30,535	1,136,745	800,492	657,101	57,464	2,682,337
当年度消費収入支出超過額	10,893	△304,125	54,766	△32,820	△12,300	△263,586
前年度繰越消費支出超過額	—	—	—	—	—	△1,900,292
翌年度繰越消費支出超過額	—	—	—	—	—	△2,183,787

富山国際大学



富山県大学連携協議会主催の FD・SD研修会が開催されました

平成23年8月26日（金）14時から富山県民共生センター・サンフォルテにおいて、変化する社会情勢や就職環境が厳しい状況を踏まえ、県内の7高等教育機関が連携し、学生の出口での質保証とそのための教育力向上を図ることを目的に、160名余りの教職員が参加して研修会が実施されました。

学習成果を重視した教育の理論と実践という観点から、神戸大学川嶋太津夫教授より「高等教育の質保証と教育力の向上」と題して基調講演がありました。

さらに、富山県下の大学生の学びを活性化させるため、文部科学省「戦略的大学連携支援事業」の代表を務められた富山大学山西潤一教授より、「地域人材育成に向けたSRM手法による教育の質保証」と題して事業報告がありました。

本会に参加した教職員は、学生の出口保証教育の重要性や手法について多くの事を学習しました。

富山短期大学

男子卓球部全国大会優勝!!

平成23年8月8日（日）～11日（木）の期間、東京都近郊を会場として、83短大（6種目、選手約2300人）が参加し、第46回全国私立短期大学体育大会が開催され、連日の猛暑の中、熱戦が繰りひろげられました。

本学からは男女卓球部、男女バドミントン部、女子バスケットボール部、女子テニス部が出場し、特に男子卓球は、個人戦ダブルス坂下（経験2年）・新田川（幼教1年）組が見事初優勝!!

さらに、団体戦が3位、個人戦シングルス坂下（経験2年）が3位と全ての種目で好成績をあげました。

また、男子バドミントン個人戦シングルス有磯（経験1年）が3位など、男子選手の活躍が目立ちました。

他の種目は健闘むなしくいざれも1・2回戦惜敗でした。参加した学生達は大変貴重な体験をし、有意義な時間を過ごしました。



富山国際大学付属高等学校

手話全国大会優勝!! 新聞部全国最優秀賞!!!



野球部の活躍に始まり、女子バドミントン部全国選抜大会初出場、女子サッカー部全国大会初出場など運動部ががんばっています。そんな中うれしい知らせが舞い込んできました。全国優勝が2つ。手話と新聞部です。文化部は活動 자체が地味で、目立ちません。実際、部員達も目立たない生徒が多く、毎日黙々と活動しているのが印象的です。しかし、日頃の努力の積み重ねが大切なところは運動部と何らかわりません。そんな彼らの中から“全国一”が2つも出たことは本当に喜ばしいことです。部活動全体に大きな刺激になっています。生徒会活動も今までになく活発になってきました。ようやく学校にも文化的な香りが漂はじめました。

富山短期大学付属みどり野幼稚園

みどり野親子クラブ

みどり野幼稚園では、子育て支援の一環として、幼稚園にあがる前の未就園の子どもたちとその保護者の方々を園に招き、「みどり野親子クラブ」を月2回開催しています。

広い自然豊かな園庭でのびのびと遊んでいただくと同時に、在園の子どもたちとの交流の機会にもなっています。また、未就園児の保護者の方々の子育て相談なども、国際大学子ども育成学部の教員の協力を得て行っており、毎回30組程度の親子の参加があります。

親子クラブを通して、みどり野幼稚園の保育を実際に見て、理解をいただいて入園を希望される親子が増えており、今後も「親子クラブ」を通して未就園児の子育て支援を充実していきたいと考えています。

